

＜ワークショップ報告＞

I-A「新しい学習環境と学習支援を考える」

担当者： 白川優治(千葉大学)

概要： 本ワークショップは、大学における新しい学習空間と学習支援の在り方を、参加者同士で考えるものとして企画した。現在、大学教育には、アクティブラーニングの導入が推奨され、学習成果の向上のために学生の自発的・自主的学習の拡充が求められている。大学が、大学教育に対するこのような現代的要請にこたえていくためには、教育プログラム・授業科目の開発や教授方法の工夫だけでなく、それを支えるための、これまでの伝統的な教室や施設設備とは異なる新しい学習環境や学習支援の在り方を、ともに考えていくことが必要である。また、視点を変えると、デジタル機器やソフトの普及を背景に、初等中等教育においてデジタルデバイスを用いた学習が導入されるなど、高大接続の観点からも、大学における学習環境の見直しも必要となっている。このような政策的・社会的要請や現実的变化のなかで、現在、各大学では、ラーニングコモンズの整備、電子黒板や電子デバイスの活用、授業録画・配信など新しい学習環境の導入が取り組まれており、その効果的なあり方が模索されている。このような動向を背景に、本ワークショップでは、参加者からそれぞれの大学での学習環境の充実のための取り組みと課題を共有したうえで、新しい学習環境と学習支援について、参加者間でそれぞれの大学の取り組み状況等の意見交換を行った。

キーワード： 新しい学習環境、学習支援、アクティブラーニング、ラーニングコモンズ

I-B「LTD 話し合い学習法」

担当者： 安永 悟(久留米大学)

概要： LTD(Learning Through Discussion)は、テキスト(課題文)を読解する理想的な学習法であり、対話法である。本学会では授業外学習時間が増える学習法と紹介した方が、通りがいいかもしれない。本ワークショップでは、LTDの基本的な考えと実施方法を、具体的な課題文を用いて体験的に理解した。また、大学授業への導入方法についても検討した。LTDは協同学習の一技法であり、個人による予習と集団によるミーティングによって構成されている。予習もミーティングも、LTDの基本的な考え方と手続きが凝縮されたLTD過程プラン8ステップ(雰囲気づくり、ことばの理解、主張の理解、話題の理解、知識との関連づけ、自己との関連づけ、課題文の評価、ふり返り)に沿って行う。参加者は過程プランにそって課題文を予習し、予習ノートを作成する。ミーティングでは、その予習ノートを手がかりに、仲間との対話を通して、課題文の理解を深める。LTDを実践するには、LTDの基盤となる協同学習の考え方と技法の習得が前提となる。LTDを獲得すると、PBLを初めとしたグループ

学習や、グループ活動を組み込んだ体験学習など、いわゆるアクティブ=ラーニングの質を高めることができる。また、LTDによる読解力が基盤となり、文章作成力の育成にも役立つ。

キーワード : LTD, 読解力, 文章作成力, 協同学習, 授業づくり

II-A「実際の指導を意識した授業づくり:

初年次ライティング指導を例にとって」

担当者 : 中村博幸(京都文教大学), 山本啓一(九州国際大学), 成田秀夫(河合塾)

概要 : 「初年次演習」の中でも、学生の「文章表現力」を高めるために、大なり小なり「文章表現」を意識した授業内容が多い。また「文章表現科目」だけを独立した科目として開講する場合もあり、その開講形態は多様である。さらに、担当者も複数となることが多い。そしていざ開講となると、カリキュラム、シラバス、授業の運営はともすれば担当者の持つ経験やノウハウにまかされることが多い。このことから複数担当者の場合は、担当者間での教育目標や授業スタイルの違いから、シラバスの不統一(自由裁量)につながりやすい。その結果、指導計画や教材・配布資料も、各担当者が個別に準備することになりやすい。今回のワークショップでは、開講にあたり押さえる(準備する)ことは何か、学生の状況把握や到達目標を設定すると共に、カリキュラムに担当者が採用する教育観や学習観とはどのようなものかについて参加者の考えをシェアし、グループに分かれて4コマの授業案を作成して発表した。今回は科目を設計コーディネートする方、実際に担当する方が参加され、事例を具体的に検討することで、参加者が抱える具体的な課題をシェアし、それぞれの課題を解決するヒントを持ち帰って頂いた。

キーワード : 初年次演習, 文章表現, 授業設計, カリキュラム

II-B「頭と体の柔軟体操:

言葉と身体のワークショップ身体知ワークショップ」

担当者 : 横山千晶(慶応義塾大学)

概要 : 身体を見据えたコンテンツをどのようにカリキュラムの中に意識的に取り入れていくのかは、高等教育の各分野で現在真剣に思考され試行されているテーマである。座学中心のカリキュラムの中にいかにして、身体性を導入したらよいのか、また体験したことを言語によりふたたび発信していくためにどのような方法があるのかについても、盛んに議論がなされている。このワークショップでは、想像力と身体的な「気づき」、および協働による活動を通して、からだと言葉をつなぎ合わせることで、大学初年次にふさわしい言語力と思考力を構築する方法を模索するものである。題材は去年と同じ、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の一幕一場の冒頭の部分を使用した。今回は180分を、いくつかの部分に分けて構成してみた。また、最後に全く同じシーンを二つの映画の中で見比べることにより、「ことば」がどのような想

像力を経て新たな創造へとつながっていくのかまで、踏み込んで考えてみた。内容は次の通りである。1)「共同での活動に入る前に」1)-1 アイス・ブレイキングのいくつかの手法・言葉と身体のワークショップ。1)-2 言葉を声に出して読んでみる。1)-3 言葉から様々なことを想像してみる。1)-4 想像したことを演じてみる。2)「再び言語化へ」2)-1 シナリオで取り上げた部分を映画で見してみる。2)-2 ふりかえり。このワークショップが目指すものは、「ことば」とは単に記号なのではなく、音を持つことで人の感情をも揺り動かし、新たな想像力の発揮へとつながるのだという気づきである。物語の全体像を把握したのちに、一つひとつの言葉がどのような意味を帯びうるのかという考察を行い、続いて身体へとつなげて「腑に落ちる」経験をさせることは、大学初年次での学びの土台の一つとなつていられる。初年次教育の中での「身体知」の位置づけは専門によってもさまざまだろう。今後は異なる分野での身体知教育を考えるセッションも組んでみたい。

キーワード : 身体知, からだと言葉, 想像力, コミュニケーション

II-C「総合的な初年次教育プログラムを編成する」

担当者 : 杉谷祐美子(青山学院大学)

概要 : 「第2ステージ」に入った日本の初年次教育は、多様な実践活動を蓄積し、相互に情報共有するだけでなく、そうした様々なコンテンツからより効果的な教育内容・方法を精選しつつ、総合的で体系的なプログラムとして編成することが求められている。本ワークショップは、今年で6年目を迎える。毎年、個人作業・協同作業を織り交ぜたアクティビティを行い、そのワークの成果を翌年に反映させながら、内容を徐々に発展させてきた。これまでの振り返ると、1年目は初年次教育の多様なコンテンツに関する情報収集と整理、2年目はスチューデント・スキルの育成を機軸にしたプログラム実施の提案、3年目は3科目で構成するプログラムの到達目標と具体的内容の考案、4年目はプログラム編成の際に参考にしたい点、新たに試みたい点等の検討、5年目は各グループでベスト3のプログラムを選び、その理由と改良点を発表してもらった。6年目の今年は、昨年に引き続き、フロアとともに総合的な教育プログラムの編成方針とプログラムのバリエーションを探ることを目標とした。具体的には、これまでのワークの成果を総括し、そこで提案された初年次教育の到達目標やコンテンツを整理したうえで、グループごとにベスト3のプログラムを選ぶとともに、それらの評価と発展を検討してもらった。また、今年は議論の時間を十分にとってワークを進められたことにより、全グループの成果発表と全体討論を充実させることができた。

キーワード : 教育プログラム, 到達目標, コンテンツ, 総合的

III-A「思考を鍛えるライティング指導法： 初年次や入学前の学生を対象として」

担当者： 井下千以子(桜美林大学)

概要： 初年次や入学前の学生を対象としたライティング指導に関する体系的な知識と実践力を身につけるため、情報を共有し、現状の問題点を俯瞰することを目的とした。まず、グループに分かれ、ライティング指導に関して、どのような関心を持っているのか、どのような授業実践をしているのか、問題を抱えているのかを、日常の授業の問題を出し合い、その内容を発表してもらった。その上で、企画者が発表内容を白板に書き出し、問題の全体像の可視化を図った。その結果、入学前教育も含め、大学1年次から4年次、卒業後までを俯瞰させる授業設計、考え抜く経験をさせるライティングの課題内容や、他の授業との連関、学士課程カリキュラムにライティング指導をどう埋め込んでいくのかなど、多面的に、問題を析出し、共に学びあう場を提供することができた。白板いっぱい書き出された内容をにらんで、真剣に考えている参加者が多く見られた。事後アンケートからは「カリキュラムマップにおける初年次の位置づけが大変説得的だった」「こんなに考えたWSは初めて」など、企画の意図を参加者と共有できたことがわかった。当初、予定していた「テキストの活用法」まで踏み込む時間がなかったことなど、次回への課題も残された。

キーワード： ライティング指導、思考を鍛える、初年次・入学前、学びあい、授業実践

III-B「初年次学生に対するプレゼンテーション指導法」

担当者： 長山恵子(金沢工業大学)

概要： 初年次教育においても座学中心の授業からの脱却を図り、グループ討議やグループ演習などを実施し、その結果をプレゼンテーションさせる授業が増えている。プレゼンテーションの実施にあたっては説明内容の充実度を評価することは当然であるが、聞き手に伝えるための技法(話し方や態度、提示資料の作成方法)の重要性も併せて指導することが必要である。このような観点から本ワークショップでは、プレゼンテーション技法の説明におけるポイントとその技法を活用するための演習の進め方を説明し、さらに演習を通して学生が自身のプレゼンテーションの良い点と改善点を把握するための評価方法とそのフィードバック方法についても検討した。参加者にも実際に演習の一部を体験してもらい、それぞれの現場で使うことができるようになることを目指した。参加者からの自身の体験談やアイデアの紹介もあり、情報共有の良い機会となった。

キーワード： プレゼンテーション指導、評価方法、フィードバック、授業実践

IV-A「初年次教育のデザインとアセスメント・プラン」

担当者： 濱名 篤(関西国際大学)・山田礼子(同志社大学)

概要： 初年次教育は、最近では大多数の大学に取り入れられ、普遍化している。しかし、初年次教育を高校から大学への重要な移行期として位置付けデザインするにせよ、専門への導入として位置付ける場合にせよ、あるいはスタディスキルの獲得を主な目的とするにせよ、そこには共通の初年次の到達すべき目標がある。本ワークショップでは、そうした初年次で学生が獲得すべきスキル等を包含した初年次教育のデザインは何かそして、そうした初年次教育の評価にはどのような評価があるかを議論した。初年次教育の評価には、さまざまな方法がある。例えば、学生調査、授業評価、プログラム評価、ポートフォリオ評価・ルーブリック等が代表的な評価法である。こうした方法のどれが適切であるか、どれが効果的であるかは学生の特徴やプログラムの性質によって異なる。言い換えれば、多様な大学や多様な学生の存在により、適切な評価方法も多様であるともいえる。本ワークショップでは、参加者が自分の大学の初年次教育のデザインについて語り合った後で、アセスメント・プランについて講師が解説し、近年注目されつつあるルーブリックを用いての初年次生用のレポートの評価を体験してもらった。実際のルーブリック評価を体験することで、初年次に求められるレポート水準について、参加者の認識とある程度の合意が得られたと思われる。

キーワード： 初年次教育のデザイン、評価方法、学生調査、授業評価、プログラム評価

IV-B「初年次からのキャリア教育をデザインする」

担当者： 川島啓二(国立教育政策研究所)・立石慎治(国立教育政策研究所)

概要： 初年次教育とキャリア教育の関係については、本学会発足時からの重要な課題でありながら、それを具体的にどのように構成していくのか、そのための方法論の開発は十分ではない。この観点から、当ワークショップでは、学士課程教育、キャリア教育、そして初年次教育の関係性を視野に入れつつ、各参加者の所属機関におけるキャリア教育について捉え直すことを目指した。前半は、ワークショップ担当者のショートレクチャーの後、参加者の所属機関において行われているキャリア教育の実践事例について、分析する機会を設定した。後半は、前半を踏まえつつ、各機関の学士課程を視野に入れながら、どのようにキャリア教育のプログラムを(再)構築できるのか・せざるを得ないかを考え、互いにアイディアを出しあい、議論し、その成果を全員で共有した。ワークショップ終了時には、各参加者の所属大学の実践について、改善プランまたは改善のアイディアを得た。

キーワード： キャリア教育、学士課程教育、カリキュラム

IV-C「協同学習の考え方と進め方」

担当者 : 関田一彦(創価大学)

概要 : 本セッションは、教育学を専門にする方々は少数で、むしろ、様々な専門の先生方にご参加いただいた。皆様、初年次における指導技法として協同学習に関心をお持ちであった。そこで、協同学習の手法のいくつかを使って、初年次教育における協同学習の意義、一般的なグループ学習に比べたときの協同学習の特長、そして協同学習の代表的な定義について学び合った。参加者同士の交流を通じて、実際にグループ活動を進める指示の仕方や協同学習の考え方、そして授業の進め方のイメージを掴み、理解を深めて頂いた。「分かりやすかった」という感想を多数いただき、概ね好評だったようである。以下、ワークショップの流れを示す。1) ウォーミングアップ(ペアと4人組での自己紹介など)、2) 背景説明「Active Learning と初年次の課題」(学習の構え・社会人基礎力)、3) 意義説明「グループ学習の弱点と CL の効用」、4) 定義説明「Johnson や Kagan の定義」、5) 振り返り「学んだことの確認と承認」、6) 締めコメント(Q&A)。

キーワード : キャリア教育, 学士課程教育, カリキュラム

IV-E「初年次学生に対する上級生のサポートをいかに組織化するか：頼りになる上級生たちを生み出す方略」

担当者 : 田中 岳(九州大学)・森川園子(国際基督教大学)

概要 : 上級生からのサポートは、初年次学生が大学に馴染んでいくための重要なリソースといえるだろう。先輩たちの頼もしい振る舞いを身近に感じられることで、不安な大学生活のスタートが前向きなものになるからである。大学生というロールモデルを提供する上級生たちの役割は、教職員や保護者の役割とは異なるものといえよう。とはいえ、初年次学生の傍らに上級生を配置さえしておけば好循環が発生するとは言い難く、上級生たちを大学スタッフへと育てる工夫が求められる。上級生たちがスタッフとして働く自覚をもつためには、どのようにして大学の活動へ巻き込めばいいのだろうか。本ワークショップでは、上級生に対する研修の実施について参加者全員で集合知を創出することが目的とされた。研修プラン作成に資するアイデアやヒントを可視化する試みとして、次のような目標、役割、過程が提示され、当日のプログラムは進められた。「目標」：ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語ることができるようになる。「役割」：担当者は会場の相互作用を活性する進行に努め、参加者には主体的な活動をお願いする。「過程」：ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体でそれらを共有する。

キーワード : 上級生, 上級生のサポート, 教職員, 研修

IV-F【初年次教育学会誌編集委員会企画】 「初年次教育学会誌への投稿論文の書き方」

担当者 : 藤田哲也(法政大学)

概要 : 第6回大会開催の時点で、「初年次教育学会誌」は第5巻第1号まで発行済みであり、次の第6巻第1号の発行に向けて編集作業を行っている最中であった。編集委員会としては、より多くの会員から本誌への投稿論文が寄せられることを望んでいる一方で、掲載する論文については一定の質を保つことに責任を負うという立場にもある。実際に、過去に投稿された論文の中には、残念ながら我々の求める基準に合わずに、掲載できなかったものもある。大学教育においても、到達目標や評価基準を明示することが必須になっている。とりわけ本学会のように、会員の持つ学問的背景に多様性がある場合には、投稿論文に対してどのような観点および基準で査読を行うのかを、事前に周知しておくことが望ましいと考える。そこで本大会ではこの編集委員会企画を、論文の体裁・書式に関する基本事項の確認からはじめ、「研究論文」「事例研究論文」それぞれについて掲載可と判断できるための最低限必要な要素についての、編集委員会の意向を会員の皆様に説明する機会とした。

キーワード : 初年次教育学会誌, 編集委員会, 投稿論文, 研究論文, 査読